

筑波大学計算科学研究センター設立20周年記念シンポジウムを開催

「筑波大学計算科学研究センター設立20周年記念シンポジウム」を9月7日（金）、つくば国際会議場にて開催しました。

筑波大学計算科学研究センターは、前身の計算物理学研究センターが平成4年に設立されて以来、20年を迎えました。スーパーコンピュータ「京」やそれを取り巻くネットワークの整備が運用の段階に入中、これからエクサスケール（「京」の100倍以上の計算性能）に向かう計算科学の検討を本格化する時期に来ています。

本シンポジウムでは、海外からの招待講演2件を含む9件の講演と、スーパーコンピュータを活用する6分野の計算科学研究者によるパネルセッションが行われ、国内外におけるエクサスケールの時代に向けた取り組みの紹介や、センターが推進してきた「学際計算科学」についての議論が行われました。休憩時間には、参加者同士による活発な意見交換も行われました。



岩崎洋一初代センター長が、計算物理学研究センター設立当時を振り返りました。



Richard Kenway 博士（Vice Principal for Computational Science, National e-Science Centre）の招待講演では、ヨーロッパにおける計算科学とスーパーコンピュータに関する取り組みの紹介を行いました。



Julia C. White 博士 (Program Manager, INCITE, Oak Ridge National Laboratories) は、「京」を上回る 20 ペタフロップス級のアメリカの最新スーパーコンピュータ「Titan」と、エクサスケールに向けた展望を講演しました。



学内外の計算科学研究者が、今後のスーパーコンピュータ活用の展望について意見交換を行いました。